



周縁の文学：ベルギーのフランス語文学 にみるナショナリズムの変遷

岩本，和子

(Degree)

博士（文学）

(Date of Degree)

2007-02-21

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

乙2917

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/D2002917>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



【 6 】

氏 名・（本 籍） 岩本 和子 （ 兵庫県 ）

博士の専攻分野の名称 博士（文学）

学 位 記 番 号 博ろ第31号

学位授与の 要 件 学位規則第5条第1項該当

学位授与の 日 付 平成19年2月21日

【 学位論文題目 】

周縁の文学ーベルギーのフランス語文学 にみる
ナショナリズムの変遷ー

審 査 委 員

主 査 教 授 松田 浩則
教 授 枝川 昌雄
助教授 宮田 眞治
教 授 吉田 典子
教 授 坂本 千代

「フランス語によるベルギー文学」の歴史を19世紀を中心にたどりつつ、その特性やアイデンティティの問題を解明していく。しかし、従来のように単なる「フランス文学」の一部として扱うのではなく、我々自身の視点をベルギー（人）に置いて、「ベルギーの文学」自体の独自性や存在意義を考察する。フランス語とオランダ語、さらにはラテン系とゲルマン系の文化が衝突するこの国の芸術文化の考察は、民族・文化・国家に対する一元的な感覚を有しがちな我々日本人にとって、言語芸術とナショナリズムの関係、ひいては文学そのものの意味を問い直す有効な手段となるだろう。またフランス文学という「中心」を別の視点からとらえ直し、「周縁の文学」のダイナミズムに注目することにもなる。

まず多言語国家ベルギーの言語状況を確認し、「ベルギー文学」の可能な定義づけをしておく。「中心」としてのフランス文学との関係から3つの時期に分けることができよう。1830年独立以降の文学不在あるいは「先駆的」な時代から、世紀末「若きベルギー」派の活躍、アカデミー設立へと続く1920年頃までを、「ベルギー文学」の統一性を明確に目指した時期―「向心的段階 phase centripète」(Cf. Klinkenberg)と位置づける。作家や知識人はフランス語を用いつつフランドル的なテーマを扱う傾向にあった。1920~50年の両大戦間はそれに対して「遠心的段階 phase centrifuge」となる。高揚の時期は終わり、ナショナリズム的テーマは薄れ、作家たちは再びパリでの活動に積極的になる。しかし第3の「弁証法的段階 phase dialectique」が特に1970年代以降の傾向となる。「ベルギー」という枠組みの揺らぎと「地方」「文化共同体」の独自性の重視、フランスに対する従属か独立かの選択を超えた共存意識が顕著な時代となる。(序章)

以上を踏まえ、第一章では独立前後のナショナリズム高揚期におけるベルギーの<ロマン主義運動>をヨーロッパ諸大国の動向との比較から考察し、フランスとゲルマンの狭間での特殊性を明らかにする。ベルギーの独立革命は、その直前に勃発したフランス七月革命の「海賊版」とも揶揄されるほど、前者の影響を被りそれを模範とした。公用語をフランス語、国家宗教をカトリックとし、立憲君主制の強固な中央集権的国家形成を目指したのである。芸術文化においても、フランス・ロマン主義運動、とりわけその自由主義的側面の影響を直接に受けた。フランス書籍の海賊版出版や雑誌文化の興隆も運動を助長する。しかし国内にオランダ語話者のフランデレン系民族を擁するベルギーは、もともと国家の始まりから矛盾と分裂の危機を孕んでいた。またフランスに対するベルギー独自の文学確立の追求は、ゲルマン性、北方精神の方へ目を向けていくことになる。ベルギー・ナショナリズムはむしろ当時のドイツ・ロマン主義に特徴づけられる民族独自の「文化」と通ずるものであり、出発点で模範としたフランス的「文明」の探求は幻想であったことがわかる。(第一章)

建国後まもなく、ベルギー民族意識高揚のために意図的に「国民神話」を創出しようとした作家がシャルル・ド・コステルである。その主要作品のテキスト分析と、作品映画化の顛末などをもとにして「神話」の実態、他文化圏での影響や誤解の性質を解明する。ド・コステルは現在でもフランスでは全く知られていないが、ベルギーでは子供から大人まで

皆知っている「国民的作家」である。フランス語を手段としての媒介言語、オランダ語を民族的魂やアイデンティティの拠り所の言語と見なし、ベルギー全体の「ナショナル」な文学確立がまだ可能だと考えていた稀な人物でもあった。諸伝説をもとに創作した『フランドル伝説』や、中世ゲルマン諸国の民間説話の主人公を使いながら舞台をスペイン弾圧下の16世紀フランドルに置き換え、民衆の抵抗と独立戦争をテーマとした『ウーレンシュピーゲル伝説』は、19世紀の独立ベルギーのナショナリズム高揚を明らかに意識していた。しかし中世民衆のフランデレン言語とのずれ、テキストのひずみ、読者層の曖昧さなど、多くの問題を抱えた作品でもあることを分析し、「ベルギー文学」の根本的な矛盾を垣間みることになる。(第二章)

ベルギーの文学活動の歴史における文芸雑誌と芸術グループ活動の重要性は注目に値する。特に19世紀末にヨーロッパの国際的な文化潮流にも影響を与え得た三大雑誌『若きベルギー』『ワロニー』『現代芸術』誌を分析する。19世紀ベルギーの雑誌は、フランスの動向に敏感に反応した大学のサークルを中心とした若者たちの文芸革新運動の牙城であり、「ベルギー象徴派」の主要な作家たちを輩出する。大国に囲まれた中で独自性を確立するために、コスモポリタニズムと地域主義を同時に目指すもので、中心志向と現実の「周縁性」との葛藤ゆえの矛盾と限界がそのジレンマであったことを明らかにした。しかし彼らの激しい芸術論争は、「ベルギー文芸ルネサンス」の熱いエネルギー源となり、ヨーロッパに向けての先駆的芸術理論の発信地ともなった。「ベルギー象徴派」文学は、フランス象徴主義に自然主義的、民族主義的要素も加えた論争から生まれたもので、さらにゲルマン・北方的要素(ドイツやイギリス)も融合する。ベルギーの独自性とは諸要素の衝突、境界域としてのダイナミックな運動の中にこそ存すると考える。ただ、世紀末の雑誌を舞台とした論争は、あまりにも饒舌で根底において「中心」を意識したものだったのだ。(第三章)

次には、この運動から生まれ、そしてずれて行った諸テキストの中に、独特の「沈黙」や民族の声のざわめき、脱中心化現象などを読み取る試みをする。世紀末ベルギーを代表し、フランス語を用いてゲルマン・北方精神を追求した象徴主義作家メーテルランクの戯曲『ペレアスとメリザンド』を資料とし、フランス人作曲家ドビュッシーによるオペラ化の過程でのテキストの変更や時代背景の分析をもとに、ベルギー人の民族主義のあり方を浮き彫りにする。原作戯曲の台詞を基本的にはそのまま採用したドビュッシーだが、ゲルマンの「ウンディーネ」伝説に通ずる<女中たち>の2場面を完全に削除したこと、ゲルマン伝説的なメリザンドの<塔の歌>を即物的な愛の歌に替えたことなどにより、原作テキストの緻密な構造や神話的特性、民族の根源的な声が消去されたことを検証する。20世紀の新しい「フランス」音楽を創出しようとしたドビュッシーが、メーテルランクを介することでワーグナーと繋がっていたことも確認する。さらに、メーテルランクの戯曲と並んで、世紀末「ベルギー象徴派」を代表する小説『死都ブリュージュ』を書いたローゼンバックについて、資料の検討やテキスト分析を行い、またこの小説をもとに創作されたオーストリア人作曲家コルンゴルトのオペラ『死の都』や、映画、文学作品、絵画などとの

比較も通して、フランドル民族意識の特質の解明をする。（第四章）

世紀末から 20 世紀初めにかけての、ベルギーの旧植民地コンゴに関するいわゆる「植民地文学」にも注目し、当時の雑誌や文学作品の分析・検討を行い、小国ベルギーの「帝国主義」的側面を明らかにした。探検から開発、民間文化人の見聞旅行にいたる各時期に書かれ、当時は広く読まれて影響力があったと思われる 3 つのテキスト（小説、エッセー）を選んで分析した。これらには、ベルギーの独自性、「周縁」からのまなざしといったものは全く見られず、ただ列強諸国と同質の中心意識や帝国主義が露骨に現れていることがわかる。また、ベルギーの文学ではないが、ブリュッセルやコンゴを舞台とし、第三者の目から見たベルギー人の考え方や位置を浮き彫りにしてくれる、同時代のイギリス人作家コンラッドの『闇の奥』も分析する。テキスト上ではいわば「不在の」都市ブリュッセルの、潜在的な力に焦点を当てることで、新たな視点からの分析を試みた。フランスにとっては「他者」「周縁」であるはずのベルギーが、コンゴを「他者」でありカオスであると設定するとき、ベルギー自らは「我々」として強力で超越的な「ヨーロッパ人」意識を持ったことが見えてくる。（第五章）

最後に、フランス語文学が主流であった 19 世紀と異なって、20 世紀に入ってから「ベルギー文学」がフランス語文学とオランダ語文学に明確に分かれていき、国家ではなく地域／文化共同体を単位とした公的諸制度に支えられるようになった状況を確認する。その中で、フランス語文学はあらためてフランスとの融合と独自性追求のジレンマの中にある。変遷してきたナショナリズム概念をあらためて確認し、現在までの「ベルギーのフランス語文学」を支える諸制度——アカデミーや文学賞、文学雑誌、研究会活動など——を確認した上で、独立 175 周年を迎えた 2005 年時点におけるベルギーの、国家と文学の存続の可能性を考えておく。（終章）

論文審査等の結果の要旨

論文提出者氏名	岩 本 和 子
論 文 題 目	周縁の文学 — ベルギーのフランス語文学にみるナショナリズムの変遷 —

1 審査委員

区 分	職 名	氏 名
主 査	教授	松 田 浩 則
副 査	教授	枝 川 昌 雄
副 査	教授	吉 田 典 子
副 査	教授	坂 本 千 代
副 査	助教授	宮 田 眞 治

2 論文審査の結果の要旨・・・・・・別紙 1 のとおり

3 試験の結果の要旨・・・・・・別紙 2 のとおり

4 学位授与の可否

上記の論文審査及び試験の結果、並びに学力の確認の結果、論文提出者は博士（文学）の学位を得る資格があることを認める。

論文審査の結果の要旨

氏 名	岩 本 和 子	
論 文 題 目	周縁の文学 ― ベルギーのフランス語文学にみるナショナリズムの変遷 ―	
要 旨		
本論文は、ベルギーが、大別すると、北部はゲルマン系民族のフラマン人、南部はラテン系民族のワロン人が多く住む複合民族国家として1830年にネーデルランド王国から独立したあと、どのようにして、そのナショナル・アイデンティティを獲得しようとしたかという問題をめぐって、文学作品ばかりでなく、その社会制度や帝国主義政策にまで視野を広げつつ、あい 拮抗する複数の文化の衝突や融和の動きを詳細に分析し論じたものであり、従来にはなかったきわめてスケールの大きな研究となっている。 序章では、ナショナリズムとの関係においてベルギーの文学を考察するにあたり、「ベルギーのフランス語文学」という概念自体がはらむ複雑さと内的矛盾が紹介される。つねにフランスの周縁にあるものという意識を捨て去ることのできないベルギーは、独自の国民文化を追求しようとしても、フランス語という他者の言語を使わなければならないという矛盾をかかえている。そして、「中心」としてのフランスと「周縁」としてのベルギーとの「距離」は、時代によって縮小したり増幅したことがクリンケンベルグらの説に依拠しつつ示される。すなわち、1830年の独立以降の文学不在の時代から、世紀末「若きベルギー」派の活躍、アカデミー設立へと続く1920年ごろまでを、「ベルギー文学」の統一性を明確にめざした第1期とし、作家や知識人がフランス語を使用しつつフランドル的なテーマを扱う傾向にあった時代と規定する。それに続く1920年から50年の時期を第2期とし、ナショナリズムのテーマが文学作品から後退し、作家たちが再びパリを目指した時代と規定する。さらに、1970年代以降に見られる傾向を第3期ととらえ、そこでは、「ベルギー」という枠組みの揺らぎと「地方」「文化共同体」の独自性の重視、フランスに対する従属か独立かの選択を超えた共存意識が顕著になった時代と規定する。 第1章では、1830年のベルギー独立は、フランスの歴史、とりわけその文化的「記号」を模倣的に再現したものであることが示される。ときにフランス7月革命の「海賊版」とも揶揄される運動で独立を果たしたベルギーは、公用語をフランス語、国家宗教をカトリックとし、立憲君主制の強固な中央集権国家形成をめざす。そうしたなかで始まったロマン主義運動もまた、やはりフランス・ロマン主義を模倣する形で始まり、フランス書籍の海賊版出版や雑誌文化がロマン主義運動の隆盛を支えたことが示される。その後で、国内にオランダ語話者のフレンデレン系民族を擁するベルギーが、しだいにゲルマン性、北方精神の方へと向かう動きが詳述される。そして、ベルギー・ナショナリズムは、出発点で模倣されたフランス的「文明」によりも、むしろドイツ・ロマン主義に特徴づけられた民族独自の「文化」に通じるものではないかという考察が示される。北方精神、ならびにゲルマン精神にたいする考察がやや表面的過ぎるという欠点があるにもかかわらず、ベルギー・ロマン主義運動のもつ多面性とダイナミズムを描き出して、興味深い一章に仕上がっている。 第2章では、建国まもなくベルギー民族高揚のために意識的に「国民神話」を創出しようとした作家シャルルド・コステルの二つの作品『フランドル伝説』と『ウーレンシュピーゲル伝説』に焦点を当てつつ、その文学的野望の意義を解明しようとする。コステルが、その『フランドル伝説』のなかで、下敷きにした民間伝説の換骨奪胎を徹底的に推し進めたり、16世紀のフランスの作家・フランソワ・ラブレーのフランス語を模倣したような擬古典的なフランス語をあえて採用することによって、現実のフランドルにとらわれない新たな言語による新たな		
主 査 記 載 氏 名 ・ 印	松田 浩則	